

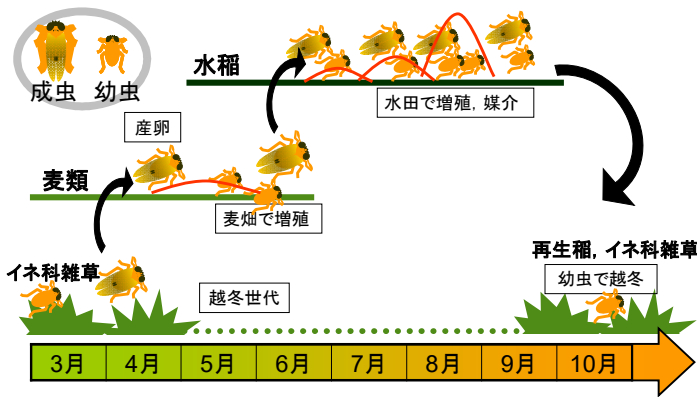
イネ縞葉枯病防除マニュアル(茨城県版)

イネ縞葉枯病とは



- ・ イネ縞葉枯病はヒメトビウンカが媒介するウイルス病
- ・ 症状は、葉に現れる黄白色の縞状の病斑、こより状に垂れ下がった葉、穂の出すくみ、不稔等
- ・ **健全な穂の減少により減収**
- ・ 発病してから治療することはできない

媒介虫ヒメトビウンカの生態とイネ縞葉枯病の関係



幼虫がイネ科雑草で越冬
 ↓
 4月上旬頃、成虫になって麦畑に飛来、産卵
 ↓
 麦畑で次世代の幼虫が増殖
 ↓
 6月上中旬頃、成虫になって水田に飛来
 ↓
 イネを吸汁、ウイルスを媒介



ウイルスを媒介するヒメトビウンカ

[ウイルス媒介のしくみ]

- ウイルスを持った虫(保毒虫)がイネを吸汁するとイネがウイルスに感染し、発病する
- ウイルスを持たない虫が発病株を吸汁するとウイルスを獲得して保毒虫になる
- ウイルスは親から子へ引き継がれ、保毒虫から生まれた子の約9割は保毒虫になる

防除対策

イネ縞葉枯病被害軽減のためには、発生状況に応じた耕種的防除および薬剤防除の組み合わせが必要

- ・ヒメトビウンカの越冬数を減らすには → 耕種的対策により生息・越冬場所をなくす
- ・イネでの発病を抑えるには → 薬剤の育苗箱施用や本田散布によりヒメトビウンカを防除する

イネ縞葉枯病防除スケジュール

月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月～2月	
栽培管理		播種	移植					収穫		
防除対策	耕種的	発生状況に応じて※							秋季耕起	イネ科雑草の除草
	薬剤	育苗箱施用		本田散布		※薬剤による防除要否は、普及センター等の情報を参考にする				

防除対策 << 耕種的防除 >>

【秋季耕起】

収穫後の刈り株から伸び出す再生稲(ひこばえ)を
早めに耕起する



再生稲(ひこばえ)の病徴

- ・再生稲は、ヒメトビウンカの生息・越冬場所になる
- ・再生稲の発病株が多いと、ヒメトビウンカの保毒虫率(ウイルスを持った虫の割合)が高くなり、翌年の被害が大きくなる

【雑草管理】

水田周辺のイネ科雑草の除草を徹底する



- ・水田周辺のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの生息・越冬場所になる
- ・水田から距離が近いほど、ヒメトビウンカの保毒虫率が高いので、特に水田畦畔等の除草を徹底する

【抵抗性品種の利用】

抵抗性品種はほとんど発病せず、ヒメトビウンカの保毒虫率を徐々に下げる効果が期待できる

〔抵抗性品種を利用する際の注意点〕

- ・抵抗性品種はヒメトビウンカの数を減らす効果はない
- ・イネ縞葉枯病多発地域では、抵抗性品種を栽培する場合でも、地域内のヒメトビウンカを増やさないために薬剤防除を行う

〔主な抵抗性品種〕

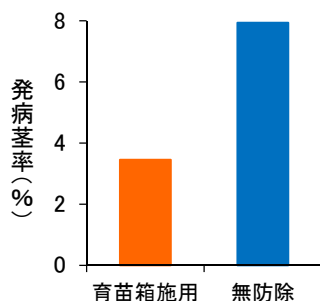
- ・主食用品種
「あさひの夢」、「一番星」等
- ・飼料用品種
「月の光」、「夢あおば」等

防除対策 << 薬剤防除 >>

【育苗箱施用による防除】

水田に飛来する成虫を防除して発病を抑制

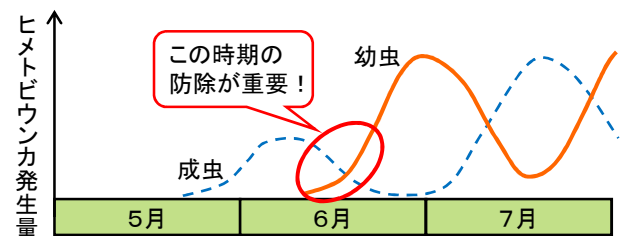
イネ縞葉枯病の発病茎率と減収率は、ほぼ一致する



【本田散布による防除】

水田内で発生する幼虫を防除して発病を抑制

本田散布の適期は幼虫発生開始期～増加期

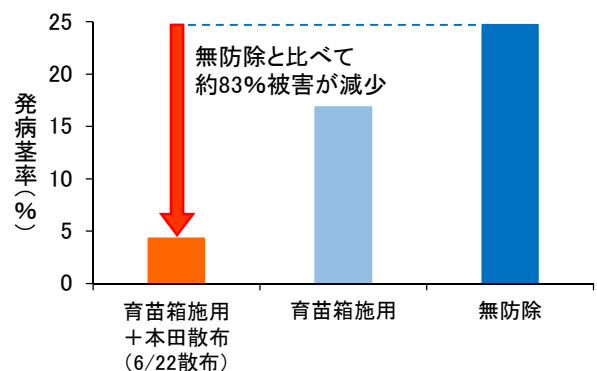
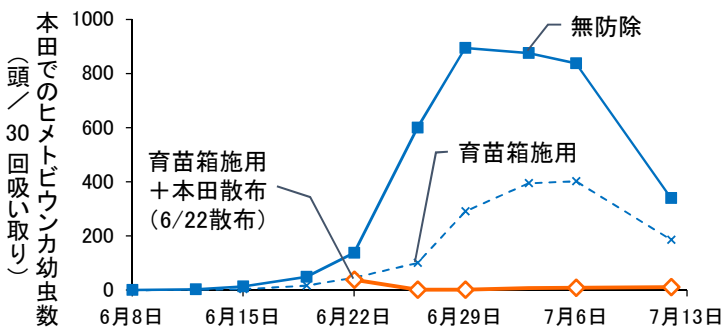


適期は気象条件によって変わるため、病害虫防除所等の情報を参考に散布時期を判断する

例年は6月中～下旬

【体系防除】

発病が多い地域では、育苗箱施用を行った上で本田散布を組み合わせる体系防除が有効



〔薬剤防除の注意点〕

- ・薬剤は、ヒメトビウンカまたはウンカ類に登録がある殺虫剤を使用する
- ・体系防除を行う際は、薬剤抵抗性を発達させないため、異なる作用機構の薬剤を組み合わせる